

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04298

研究課題名(和文) アイデンティティに基づく学習動機づけの形成支援に関する研究

研究課題名(英文) A Research on support for formation of academic identity based motivation

研究代表者

伊田 勝憲 (Ida, Katsunori)

立命館大学・教職研究科・教授

研究者番号：20399033

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：学習者の生き方や人生の目標について、内発的目標(自己の成長、コミュニティへの貢献など)と外発的目標(経済的成功や名声など)の2側面から捉える目標内容理論の視点と、アイデンティティ形成に向けたモラトリアムの視点を合わせ、アイデンティティに基づく学習意欲の質を捉える質問紙調査項目を開発した。主に高校生を対象とした3年間の縦断的調査により、1年時において内発的目標が高いこと、外発的目標について一貫して男子が高いこと、3年時において女子の積極的モラトリアム(探索)の低下などが見られた。一連の調査結果から、発達段階とジェンダーの交互作用により学習意欲の質が影響を受けるというモデルの構築に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の理論では、外発的目標よりも内発的目標が望ましい(学業成績や主観的幸福感などの適応的な指標を促進する)と考えられているが、特に進路決定状況との関連では、短期的に外発的目標の高さが有利に働いている可能性も示唆された。学術的意義としては、性別によって期待されている進路が異なるなど、学習者自身の希望進路と期待とのミスマッチなどの要因について検証する必要性が示されたことが挙げられる。また、社会的意義としては、いわゆるジェンダー平等の視点を踏まえながら、地域の特性や学校特有の文化を踏まえた学習意欲の喚起が新たな課題として見えてきたことが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：From the perspective of the Goal Contents Theory, that distinguishes those two types of goals: intrinsic goal (personal growth, contribution to the community, etc.) and extrinsic goal (the desire to make more money, the desire to attain social recognition, etc.), We have developed a questionnaire survey items that captures the quality of motivation for learning based on the identity, focusing on the moratorium for identity formation. A three-year longitudinal survey targeting high school students showed that the intrinsic goal was high at the 1st year, the extrinsic goal was consistently high on male students, and moratorium was low on female students at the 3rd year. A series of survey results led to the construction of a new hypothetical model in which the interaction between developmental stage and gender leads to the development of identity-based academic motivation.

研究分野：教育心理学

キーワード：動機づけ 目標内容理論 アイデンティティ モラトリアム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、自己調整学習等の文脈においてアイデンティティと動機づけの概念の関連が注目されている。人生の目標が自律的動機づけをはじめとする多様な適応指標に影響を与えるという目標内容理論 (Vansteenkiste, Lens, & Deci, 2006)、その人の属するカテゴリーや生き方・価値観の総体である社会的アイデンティティによって動機づけが喚起されると考える“identity-based motivation”の理論 (Oyserman, 2007) が健康や学業等の領域で適用されつつある。

(2) 学習内容の背景にある先人(過去の科学者)たちの生き方や未来への思いといったストーリーに触れたり、学習者自身がすでに内面化している価値観と学習内容の持つ価値との接点に教師が言及したりすることで、学習者側の同一化(価値の内面化)が促進される可能性とともに、その内面化された複数の価値を統合する学習者としてのアイデンティティが形成されることにより、アイデンティティに基づく学習動機づけが喚起される可能性に思い至った。

2. 研究の目的

(1) アイデンティティに基づく学習動機づけの測定尺度開発を行う。学習者のアイデンティティと学習内容との関係性に着目しながら、典型的な状態像を特定・分類し、尺度項目化を行う。その際、自律性の程度や他者・社会との関係などに着目して、学習意欲の質的側面を捉える項目とすることを目的とする。

(2) 本研究が着目するアイデンティティに基づく学習動機づけの喚起に寄与するような特色ある協力校の教育プログラムの実施機会に着目し、また、独自の教材開発による実践を通して、どのような時期にアイデンティティに基づく学習動機づけが形成されるのか、縦断的・継続的な調査に基づいて効果検証を行う。その上で、アイデンティティに基づく学習動機づけ形成のモデル構築を行う。

3. 研究の方法

(1) アイデンティティと動機づけの両方に着目しているその他の文献、特に発達心理学的な研究として青年期の時間的展望や目標設定等を取り上げている文献の展望を行い、延べ 960 人の高校生を対象に、学習場面に適用可能なアイデンティティに基づく学習動機づけを測定する質問紙尺度項目を作成する。また、先行研究において用いられている指標を参考に、関連項目を含む縦断的な調査を実施し、開発した尺度の妥当性検討を行うとともに、調査協力校の特色あるカリキュラムが展開している中での学習動機づけの質の変容を時系列的に検討する。

(2) 加えて、大学生を対象に、教職科目の授業内容の一環として授業通信による双方向的な対話を実践し、講義内容及び将来の職業に関わる態度の変容とアイデンティティ及び学習意欲の変容との関係について検討する。

4. 研究成果

(1) 学校教育現場(高校)における時間的制約を考慮し、少数の項目で学習意欲の質を測定し、その個人差を類型化して示すための分析を行った。外発的目標に基づく生徒像、内発的目標に基づく生徒像、消極的なモラトリアム(自由)志向の生徒像、積極的なモラトリアム(探索)志向の生徒像の4つについて180字程度で表現し、それぞれの生徒像にどの程度当てはまるかを5段階で回答させる質問紙が開発された。

(2) 上記質問紙4項目の回答プロフィールによるクラスター分析の結果から6つの類型を抽出し、妥当性の検討を行った。内発的目標(自己の成長や社会への貢献)と外発的目標(有名大学進学や将来の高収入)の両方が高い「両目標追求志向」群と、内発的目標のみが高い「内発目標志向」群が、一般的に適応的な指標との正の関連が認められた。特に内発目標志向がより適応的であるという結果は、目標内容理論に基づく先行研究とも整合的であり、少ない項目であっても測定の妥当性が確認された(表1)。

(3) この「アイデンティティに基づく学習動機づけ(学習意欲の質)」を測定する質問紙を用いて、高校3年間の縦断調査を行った結果、3年間の時間的な安定性(信頼性)が確認された。表2はその一例(1年時と2年時のクラスターの対応関係)である。カイ二乗検定を行い、調整済み残差を求めた結果、6つ全ての類型(志向)において、同じ志向が維持されやすいことが示された。

(4) その上で、質問紙の4項目それぞれについて、年次進行に伴う変化の傾向を捉えているかについての検証を進めた結果、当初の計画にはなかった性別による違いが無視できない程度に見られることが明らかになった。具体的には、有名大学や将来の収入を重視する「外発的目標」が3年間一貫して男子の方が有意に高いこと、そして3年時において女子の「模索」的な学習意欲(不安や不本意感を抱きながらも模索を続けて学習に取り組み続ける姿勢)に有意な低下(学年と性別の交互作用)が認められた(表3)。

表1 学習意欲の質による6類型別に見た関連指標の平均値(SD)

	Cluster 1 内発目標 志向 n=135	Cluster 2 両目標 追求志向 n=156	Cluster 3 自由模索 志向 n=122	Cluster 4 内発自由 志向 n=96	Cluster 5 両目標 模索志向 n=59	Cluster 6 内発模索 志向 n=66	全体 N=634	分散分析 F(5,625-628) p<.001 多重比較 p<.05
将来計画 =.812	3.53 (0.81)	3.01 (0.87)	2.50 (0.84)	2.50 (0.79)	2.36 (0.71)	2.54 (0.72)	2.84 (0.91)	34.28 1>2>3456
学習価値 =.717	3.54 (0.84)	3.38 (0.94)	2.95 (0.87)	3.18 (0.82)	3.40 (0.82)	3.18 (0.77)	3.28 (0.88)	7.19 1>34,25>3
現在充実 =.674	3.75 (0.72)	3.41 (0.74)	3.19 (0.87)	3.31 (0.77)	3.12 (0.73)	3.12 (0.76)	3.37 (0.80)	10.72 1>23456
拡散傾向 =.661	2.66 (1.04)	2.88 (1.05)	3.37 (0.93)	3.53 (0.95)	3.42 (0.97)	3.33 (0.99)	3.12 (1.05)	13.89 12<3456

表2 クラスタ分析による学習意欲の質の類型における1年時と2年時の対応関係の人数分布

1年時	2年時	Cluster 1 内発目標 志向	Cluster 2 両目標 追求志向	Cluster 3 自由模索 志向	Cluster 4 両目標 模索志向	Cluster 5 低目標 志向	Cluster 6 内発模索 志向	1年時 計
C1 内発目標志向		28Δ**	18	8	0▼**	13	13	80
C2 両目標追求志向		12	24Δ**	6	15	13	1▼**	71
C3 自由模索志向		2▼*	3	18Δ**	4	6	4	37
C4 両目標模索志向		9	5	6	20Δ**	5	8	53
C5 低目標志向		5	2	2	2	10Δ**	1	22
C6 内発模索志向		8	2▼*	5	13Δ*	5	10Δ*	43
2年時 計		64	54	45	54	52	37	N=306

²=126.05, df=25, p<.001, Δ/▼:残差分析により有意に多い/少ない(*p<.05, **p<.01)

表1のクラスター名称と一部異なるのは、2年分のデータをまとめて再分析を行い類型を構成し直したことによる。

表3 学年・性別による各タイプの平均値の比較

	1年時		2年時		3年時		主効果 学年	性別	交互作用
	男子	女子	男子	女子	男子	女子			
タイプ1 外発的目標	3.11 (1.13)	2.23 (1.08)	2.98 (1.18)	2.38 (1.10)	3.17 (1.23)	2.35 (1.15)	0.96	57.34 ***	1.92
タイプ2 内発的目標	4.03 (0.95)	3.96 (1.00)	3.57 (1.16)	3.73 (1.07)	3.66 (1.00)	3.63 (1.17)	15.61 ***	0.05	1.54
タイプ3 自由	2.30 (1.18)	2.49 (1.23)	2.41 (1.23)	2.40 (1.20)	2.24 (1.12)	2.15 (1.17)	4.90 **	0.05	1.74
タイプ4 模索	2.99 (1.36)	2.94 (1.40)	3.13 (1.33)	2.99 (1.35)	3.03 (1.34)	2.57 (1.28)	4.92 **	3.08 †	3.23 *

上段:平均値,下段()内:標準偏差。

N=301(男子 n=139,女子 n=162,ただし外発的目標以外は男子 n=138)。

†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

(5) 卒業後の進路決定状況を踏まえた追加分析の結果、特に私立大学及び専門学校を選択した女子において2年時から3年時にかけての「模索」得点の低下が著しく、早期に進路を決定して模索を中止したように見受けられた。同時に、浪人することになった女子においても同様に「模索」得点が低下していたが、その場合には、明確な目標が見つかったという意味で「模索」から脱した可能性も示唆された。また、男子の場合、「模索」得点の有意な低下は見られなかったが、それはあきらめずに「模索」し続けていた可能性と、「模索」しつつも明確な目標が見つからずに進路選択を決定するに至った可能性の両方が考えられる。

(6) 上記のような心理社会的危機(いわゆるモラトリアム)を経て、打ち込むべき課題や目標が見つかったことによる「模索」からのフェイドアウトと、一方で、そうした傾注する課題や目標が見つかっていないが「模索」から離れてしまうという2つの可能性について、それを弁別できるような測定方法の改良などが今後の課題である。

(7) 高校生対象の調査に加えて、大学生を対象とした教職科目の講義における調査を実施し、学期当初と学期末のそれぞれにおいて、アイデンティティ発達尺度得点と学習意欲得点(課題への価値希求及び価値評定)の間に中程度の有意な相関が見られた。また、授業通信による学生との双方向的な意見交換を教材として活用し、講義内容及び将来の職業に関わる態度を測定したところ、計4項目のうち2項目について有意な変容が認められ、その変容とアイデンティティ及び学習意欲(課題への価値づけ)との間に一部関連が見られた。

(8) 一連の調査結果から、地域・家庭及び学校等における期待などの環境的・文化的特徴を背景に、発達段階とジェンダーによる交互作用によりアイデンティティに基づく学習への動機づけの発達もたらされるという新たな仮説的モデルの構築に至った。地域文化による違いを考慮したより大規模な調査による検討が次の段階の研究課題とされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 伊田勝憲	4. 巻 69
2. 論文標題 高校生の学習意欲の質を捉える簡易な質問紙開発の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）	6. 最初と最後の頁 163-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00026225	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊田勝憲	4. 巻 67
2. 論文標題 アイデンティティに基づく学習動機づけの形成	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）	6. 最初と最後の頁 159-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 内発的・外発的目標に着目した学習意欲の質の簡便な測定方法の開発：クラスター分析による類型化と高校1・2年次の縦断的検討から
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 高校生の学習意欲の質は3年間でどのように変容するか 学年と性差の2要因に着目した縦断データの分析から
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 内発的目標・外発的目標とアイデンティティの関係を捉える：高校生を対象とした学習意欲の質の簡便な測定方法の妥当性検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 アイデンティティに基づく学習動機づけ形成のエピソード：大学生を対象とした回顧法による自由記述から
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 高校生を対象とした学習意欲の質の簡便な測定方法開発の試み：4つのタイプの生徒像への自己評定パターンと1タイプ強制選択との比較から
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 大学生は意欲が高まらない時どうしているか：場面を限定しない動機づけ調整方略の自由記述の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第58回総会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 学習意欲の質と進路決定状況に見る高校生のジェンダーギャップとその背景
3. 学会等名 関西地区青年心理学研究会2020年2月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 高校生の学習意欲の質を捉える簡易な質問紙調査項目作成の試み
3. 学会等名 心理科学研究会近畿地区2020年2月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊田勝憲
2. 発表標題 高校生の学習意欲の質にみるジェンダーギャップ: クラスター分析による類型化と高校1~3年次の縦断的検討から
3. 学会等名 心理科学研究会2019年秋の研究集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----